

『ユートピアへの想像力と運動』

— 歴史とユートピア思想の研究 —

小林一美・岡島千幸編 御茶ノ水書房 (2001年 5000円)

杉山 文彦

いつのまにか「ユートピア」という語の持つ意味と言うか或いは社会的位置付けとでも言おうか、そのようなものがすっかり変わってしまったと気づく経験をした人は少なくないであろう。今にして思えば1960年代頃まで人が未来を語る時には、何ほどかユートピア的なものが含まれていたものであった。現実の社会主義国家はすでにユートピアの輝きを失ってはいたが、イデオロギーとしての社会主義のユートピア性はまだ人々の心を捉えつづけており、反社会主義者もそのユートピア性には一定の配慮をせねばならなかった。未来を語ることは現実への批判であり、そこには必ずユートピア的なものが含まれていた。しかし、1968年に先進国各地で発生した学生反乱とその挫折、76年の中国での「文革」の終末、89年の天安門事件（第二次）とその後に起ったソ連東欧社会主義圏の崩壊など一連の出来事は、20世紀のユートピア運動が実際には逆ユートピアとなってしまうことを白日の下に曝した。このような状況の下で、さし当たって餓えや寒さに苦しめられることの無い我々先進国住民の多くは、いつしかユートピアを語らなくなった。

はたしてこれは正常なことであろうか。21世紀はユートピアなしですむと言うのであろうか。20世紀のユートピア運動が逆ユートピアであったとして、それではユートピア運動の十分に成立しなかった地域はどうであったか。この二つの地域の相互関係のあり方が、ユートピア運動を大きく規定していたのではないか。社会主義圏崩壊後あたかも万能の勝者のように見なされた市場経済主義も、今やそれ自身逆ユートピアの様相を呈しているのではあるまいか。9月11日の同時多発テロ以後のアメリカの一連の行動は特にその感を強くさせる。あたかも古代スパルタの市民とヘイロータイとの関係のように、富者による貧者への宣戦という絶えざる臨戦体制によって秩序を維持しようとしているかに見える。世界がこのように見えるとき、人は絶望と憎しみによって歪んだユートピア運動に邁進するか、無気力と退廃の淵に沈むかしかない。20世紀のユートピア運動は確かに多くの悲劇を生み出した。しかし、ユートピアを忘却することは(特に国際関係において主導的立場にある先進国住民が忘却することは)更に多くの悲劇を作り出すことになる。

ここに取り上げる神奈川大学人文学会ミレニアム記念出版『ユートピアへの想像力と運動』は、時代にふさわしくユートピア論に正面から取り組んだ書である。7篇の論文と講演記録とインタビュー記録各1篇づつからなる本書は、然しながら、これまた時代を反映して逆ユートピアの分析から始まっている。巻頭の三つの論文、小島晋治「ユートピアから逆ユートピアへ」、小林一美「中華帝国を夢想する反逆者たち」、後藤晃「満州農業移民とユートピア」は、東アジア文明圏における近代のユートピア運動の問題点を鋭く明確に指し示している。小島論文は

中国共産党史の中から、1930年代に江南の共産党革命根拠地で起ったA B 団肅清事件、40年代の延安における反奸闘争、60年代の大躍進・人民公社化運動の三つを取り上げ、その出来事の具体的経過を最近の研究に基いて詳述し、そのいずれもがユートピア運動における逆ユートピアであったことを論じている。そしてこのような悲劇の原因を、中国古来のユートピア思想である「大同思想」とマルクス主義の階級闘争論が結合した「毛沢東思想」、権利の平等ではなく実質平等を求める性急で偏狭な農民の「平均主義」、この両者の結合によって説明しようとしたものである。ここで考えさせられるのは、物質的にも精神的にも自立の基盤をもたずに時代の動きに翻弄される知識人や民衆の姿である。これは同じ東アジア文明圏に暮らし、多くの文化を共有する我々にとって他人事ではない。

小林論文は、中華民国期から中華人民共和国成立後の1960年代にいたるまで、中国各地に繰り返し現われる夥しい数の「真命天子・真龍天子」事件を、『中華人民共和国地方志叢書』から拾い上げ、それらが大同思想につながる「皇帝革命幻想」を持ち、同時に官職に強いこだわりを持っていたことを明かにしている。そして、この様な「皇帝革命幻想」は二千年以上にわたって繰り返された王朝交替の易姓革命と基本的に同一であるとしている。現在の中華人民共和国を歴代王朝と同一視すれば、一面化の誇りを免れない。しかし、この繰り返し現われる「真命天子・真龍天子」の存在は、中国革命の延いては中華人民共和国の一面を雄弁に物語っていると言えよう。後藤論文は、「五族共和」による「王道楽土」の建設の中核を担うものとして打ち出された「満州農業移民」政策を、その理念、立案過程、移民の選定・送り出しの経過、現地での実情等多方面にわたって検討し、未開地に独立自営の日本人村落を建設する計画が、実際には中国人を立ち退かせた既耕地で中国人を小作や農業労働者として使うように変質してしまっていたことを論じたものである。最近一部で石原完爾再評価の動きが見られるが、その場合もこの農業移民の実情等を踏まえて考察されるべきであろう。

以上の三論文は、ユートピア論そのものと言うよりむしろ、20世紀のユートピア運動の否定的側面を中心に論じたものである。その対象が日本と中国であることは、同じ文明圏のこととしてそれだけ痛切であったと言うことであろう。これに対し残り6篇は、講演記録の辻井喬「歴史とユートピアの消滅」とインタビュー筆記（聞き手 小林一美）中村平八「ロシア革命、ソ連社会主義とは何であったか」の二つがやや中間的性格を持つほかは、ユートピア論そのものを論じようとしたものと言えよう。ただ、山田徹「ドイツ・ Kommunismus再論」はドイツ共産党史研究のK・M・マルマンの著作『ヴァイマル共和国の共産主義者』を紹介しつつ、当時のドイツの政治党派・宗教セクト・地域社会の紐帯等について論じたもので、社会史研究、政治史研究の方法論の検討など興味深い内容を含んでいるが、ユートピア論としての切り込みは少ない。岡島千幸「ユートピアと民衆の心性」は14世紀のイングランドに生まれた傾向の全く異なる二つの作品「コケイン（お菓子之国）」と「農夫ピアズの夢」を紹介し、そこに表れた民衆の中世封建体制に対する批判を見る。とくに「農夫ピアズの夢」はワット・タイラーの乱の指導者ジョン・ボールに影響を与えた可能性を指摘し、さらのトマス・モアの『ユートピア』に連なるものと論じている。ユートピアが本来の役割を果たした時代のことと言うことになるのであろうか。

的場昭弘「スピノザとマルクスのユートピア」は、この両者のユートピアは通常考えられる様なゴールとして明確に提示されたものではなく、スピノザのユートピアは人間をもその中に含む自然を開示する神の手の中にあり、マルクスのそれは自然に対する人間の働きかけによって引き起こされる人間と自然の相互作用の中に現われるものであることを、両者の思想を検討する中から結論づけている。確かに、考えてみれば神ならぬ身の人間が描く未来像が完全なゴールとしてあるはずはない。しかしまた、文明が変化するものである以上、人はその運動を自ら捉えねばならない。そこにユートピアが描かれる必要が生じるが、それはゴールではなく象徴に留まるべきであろう。この意味でこの的場論文にみるマルクスのユートピアは、その本来の在り方を示したものと言えるかもしれない。しかし、これを実践の場において考えれば、それが極めて困難なことであることは、一目瞭然であろう。現実にはマルクス主義に代表される近代のユートピア運動は、描かれたユートピアをそのまま目標とってしまう傾向が強く、そのゴールとの距離によって進歩と反動、正義と悪、敵と味方といった二分法を作り出し、多くの悲劇を引き起こした。

しかしながら、それでもユートピアは描き続けられねばならぬであろう。人々がユートピアを語らず、現状追認に安住しようとするとき、必ず絶望と憎悪に歪んだユートピアが立ち現われる。では21世紀のユートピアはどのように描かれるべきか。それを示唆するものとして、藤間生大「ウチナンチューの二人の歴史研究者とヤマトンチューの一人の作家」を挙げることが出来よう。この論文は沖縄で著名な高良倉吉と太田昌秀との間に起こった論争と、それに関連して大江健三郎が提起した「琉球の経営主体」の問題を受けて、16世紀から17世紀にかけて琉球に甘藷、綿、ウコン、砂糖生産の導入に尽力したと言われる儀間真常たちの活動を顕彰することによって答えようとするものである。多くの文献からの引用と、様々な見方を突き合わせたかなり錯綜した文体で、決して読みやすい文ではないが、琉球のおかれた厳しい状況の中にあって、その長い歴史と現状を踏まえつつ自立の方向を模索する行き方は、20世紀の世界大のユートピアに代る新たなユートピアの描き方の一つを指し示していると言えよう。